



吃音への理解深める

生坂小で全校学習

生坂村生坂小学校で14日、言葉がつかえたり出にくかったりする吃音について、全児童約70人が理解を深める授業があった。千曲市で整体院を

子どもたちの学習を見守る清水さん(中央)

営む吃音当事者の清水直樹さん(32)と、松本市の言語聴覚士内藤麻子さん(51)が講師を務め、吃音の話し方をそのまま受け止める大切さを語り掛けた。

清水さんは、保育園の年中園児の頃、誕生日会で自分の名前をうまく言えず、吃音を意識し始めたという。小学校では「起立」の「き」の音が出なかったと振り返った。吃音の人が言葉に詰まった時に周りはどうすればいいかとの児童の質問に「先回りして聞く」としがちだけれど、最後まで待つてもらえるところらしい」と話した。

内藤さんは、吃音がある人は100人に1人程度おり、どもるのが当事者にとって自然な話し方だと説明。「抑えようとすると、とんとん話しづらくなることを知ってほしい」と呼び掛けた。5年の浜野楽君(10)は授業後、「吃音の人がいたらその人に合わせて接したい」と話した。